紹介

比良山古人霊託
漂到琉球国記

書陵部が昨年コロタイプをもって原型のまま複製頒布した九条家旧蔵の稀覯書に、標記の二書がある。前者は延応元年五月、九条関白道家が病に臥した際、祈禱によばれた僧慶政が、刑部権大輔家盛の妻に憑いた比良山古人と名のる天狗との間に交わされた問答の筆記である。古人（天狗）はみずから「我是聖徳太子御時之者、大織冠已前之仁、謂摂籙臣先祖也」と名乗り、法性寺辺の根本惣領主として、その地に伽藍が建立せられる由を聞いて見廻のため出て来た旨を告げたので、慶政はその所望に従ってどんな善根でも修するから、意趣を翻して守護神となり給うよう顧い、さらに詳しく天狗の所在を伺い糺して、古人のために金泥法華経幷に浄土三部経を書写し、十三重一丈六尺の石塔をば造立すべきことを約する。それによってその意と和ごめた古人は慶政から問われるままに道家をはじめ、内裏（四条院）、関東（将軍頼経）以下現存の人々の寿命について予言する。その予言はその後の歴史の実際とは甚しく相違していて、霊託の信憑性を疑わせるが、興味のあるのはそれにつづいて行われる物故者の後生についての問に対する古人の答で、それによると北条義時、二品（政子）後高倉院、後堀河院等についてはただ「不知」といわれるだけであるが、月輪殿（九条兼実）や普賢寺入道殿（藤原基通）らについては「入此道（天狗道）」と答えられていることで、吉水前大僧正（慈円）や薬璧門院（藤原尊子）らも同様で、あるいは「住愛古護山」といい、あるいは「常住蓮台野辺」といわれる。また教界では明恵房高弁は都率内院に上生たといわれるに対し法然房や善念房はともに無間地獄に堕したと唱えられる。とりとめもない放言といえば、それまでながら、こうした託言の中にもその時代のこれらの人々に対する評価の一端が現われているといえぬこともないであろう。時代の意識といえばこうした霊託をばまじめに信じていた事実こそ無視し難く、とくに、その口を通じて天狗というものの形貌（其長は三尺ばかりで頭幷に身は人の如く足は鳥に似て翅あり）やその飛行方法、衣服、食事、妻子等が、詳しく物語られていることはすこぶる珍重すべきことといわねばならない。中世を通じてかような天狗への俗信がひろく行なわれた事実は太平記や天狗草紙にもしばしば物語られて居り、敢えて驚くに足らぬともいえるが、そうした俗信やそのイメージがどのようにして成立ち、また何故に人々にそのように強く印象づけたかの秘密をこれほどよく知らせてくれる史料は他に多くはないであろう。本書は九条家伝来本のほか猪熊信男、西田長男両氏らの蔵本中にもその写本がある由であるが、印行されるのはもとより、この度が最初であるので、極めて簡略ながらその大要をここに紹介した次第である。

ところでこの比良山古人の霊託を聞いてこれを筆録した僧慶政なる人物については、猪熊本（文亀二年写）に「証月上人ノ名、峯殿ノ兄ナリ、乳子取落ニ依テ背骨出ル故ニ釈門ニ入ル、一音院法華山寺字峯ノ堂等ノ祖師」との記録ある以外、多く知られるところがなかったが、九条家旧蔵書の中にはかなり慶政関係の資料がある由で、右霊託と同時に複製された「漂到流球国記」も亦実にかれの筆に

なるものである。

本書は寛元元年九月、入宋のため肥前松浦を出帆した船が途中颱風のため琉球に漂到した顚末を記したもので、慶政自身の体験ではなかったようであるが、記事は極めて写実的で想像による文飾が少なく十分信頼性を有するように思われるのは、かれも建保のころ一度入宋して仏像経巻等を将来したことがあったことにもよろう。記事中もっとも興味のあるのは、風のために琉球らしい島に漂着した一行が恐る恐る上陸して最初に見た仮屋の炉の中に人骨を見付けて一同魂を失い、まがう方なき琉球国へ漂着したものと観念したという条で、恐らく風葬洗骨の習俗ある琉球で葬屋に用いられた仮屋を見ての印象でなかったかと思われるが、「今昔物語」巻十一中の記事にもあるように、中世には琉球は食人種の住む島であるとの観念がひろく行なわれていたことを思うと、かれらの速断と恐怖もあながち無理からぬところといわねばならない。一行はその後村人に会い米を与えて代りに紫苔と芋とを贈られ無事に宋への渡航を終るのであるが、巻末には、赤巾をもって頭をまとい、赤衣を着て腰に銀帯を用いた琉球人が軽舟を駆って弓を射る様を描いた絵が添えられている。それは決して素人ならぬ巧みな筆致で、筆者慶政に大いに絵心のあったことを知らせてくれる。本文と相俟って数少ない中世の琉球史料としてもっとも珍重すべき文献というべきであろう。

なお本書の紙背は仁治三年十月日付松尾社前神主秦相人陳状となって居り、同社領越中国松永荘、信濃国今溝庄ならびに神主職の相続に関する一族の争に関連するもので、表記の文献とは何のつながりも認められないが、独立して中世荘園史の研究に十分役立てうるものであろう。（非売品）　（柴田　実）

会　報

二月例会

二月二日（土）午後一時より
於　京都大学史学科第二教室

インド史の時代区分　岩本　裕
（発表内容は論文として本誌に掲載予定）

東南アジアと日本　岩田　慶治
――比較民族学の試み――（スライド使用）

〔要旨〕　東南アジアと日本とは互にきわめて類似した社会をもち、文化をもっている。ともに東アジアの稲作文化圏にぞくし、人種的にも互に近縁である。しかし、一歩たち入って東南アジアと日本との比較を試みようとすると、なかなか厄介な問題がでてくる。似ているということは疑いない事実なのであるが、さて両者の系統的関係を実証しようとすると、たちまち数多くの難点に逢着することになる。また、ときには証明不能の事実に出くわすことにもなるであろう。そこで、さしあたってここでは次のような方針のもとに両地域の比較を試みることにした。(1)どのように些細なことがら、断片的な資料でも拾いあげてゆくこと、比較資料を豊富化すること、